

平成 25 年度

谷田貝ゼミ卒業論文

「オタカル 2 世の敗北と戦術の変革」

幼児教育学科第一部

24-426

2-D

鈴木 唯

目次

1. はじめに
2. 方法
3. オタカル 2 世とは
4. オタカル 2 世とルドルフ 1 世
5. マルヒフェルトの戦い
6. マルヒフェルトの戦いにおけるルドルフ 1 世の戦術
7. 時代の変遷に伴った戦術の変革
8. 当時の奇襲に対する評価
9. 考察
10. 引用・参考文献

1. はじめに

私がオタカル2世を知ったきっかけは趣味で読んでいた歴史書だった。

ヨーロッパに広大な領土を持ち、鉄と黄金の王と呼ばれたオタカル2世が敗れたのが弱小貴族であったハプスブルク家の始祖ルドルフ1世だったというのにはとても驚くと同時に私は1つの疑問を持った。

何故皇帝になる前は田舎の弱小貴族であったルドルフに対し、圧倒的兵力を持つオタカル2世がマルヒフェルトの戦いにおいて敗北したのか。そしてルドルフ1世のとった奇襲という作戦が当時どういうものであったのかという点だ。

その2点について知るために今回卒業論文で取り上げることにした。

2. 方法

図書館やインターネットを利用し、参考書籍や論文を参考とし、マルヒフェルトの戦いにおいてオタカル2世が何故ルドルフ1世に敗北したのか。そしてルドルフ1世のとった奇襲という作戦が当時どういうものであったかについて考察する。

3. オタカル2世とは



図1 オタカル2世(1230~1278) (Aus den Königssaaler Annalen より)

オタカル2世(※以下オタカル)はボヘミア王ヴァーツラフ1世とドイツ王フィリップの娘クニグンテの下に次男として生まれた。オタカルは兄であるヴラディスラフの死去によりヴァーツラフ1世の後継人となり、1253年にボヘミア王となった。

ボヘミア王となったオタカルはオーストリア公フリードリヒ好戦王の姉マルガレーテと結婚することによりオーストリア公を継承し領地を拡大、ヨーロッパの覇王となる。

しかし、神聖ローマにおける皇帝選挙ではその力の強大さからかえって選帝侯たちから危険視され候補から外されてしまうこととなった。

4. オタカル 2 世とルドルフ 1 世



図2ルドルフ1世(1258～1291) (<http://www.onyx.dti.ne.jp/~sissi/episode-07.htm>より)

選ばれたのはスイスの片田舎の弱小貴族、ハプスブルク家のルドルフ1(※以下ルドルフ)世だった。ルドルフが選ばれた理由は選帝侯が傀儡としての扱いやすさを見越してのものであったが、その目論見は大きく外れることとなる。

スイスの片田舎の弱小貴族が皇帝になることなど到底認めることができなかつたオタカルはルドルフの召喚に応じようとしなかつた。そんなオタカルに対し選帝侯たちはルドルフにオタカルを屈服させ、オーストリアの領地を取り上げて勢力を削げとの要求を突き付ける。ルドルフもオタカルをこのままにはしておけないと、「ボヘミア王が1274年1月までに彼が封主たるドイツ王の前に現れ膝を屈し、忠誠を誓わぬ時は、そのものを帝国法の保護外に置くものとする」との宣言を出す、それでもオタカルは応じようとはしなかつたためルドルフに残された手段は武力で屈服させることであつた。

選帝侯はお手並み拝見とばかりカルドルフの支援を行うことなく静観を決め込み、皇帝になつたとはいえ弱小貴族であるルドルフと広大な領土を持つオタカルとの勢力差は圧倒的であつた。

しかしルドルフには不思議な力があつた、菊池(1)によると「自分の個人的目的を成し遂げようとするときタイミングよくいつも同盟者を見つけることができる」という才能である。

ルドルフは息子との政略結婚とケルンテン領土封土によりチロル伯のマインハルト2世、その弟のゲルツ伯アルブレヒト、そしてフランケンの裁判所を任せその他にも様々な特権を与えることによりニュルンベルク城伯のハインリヒ、彼の息子と自身の娘との政略結婚と持参金代わりの上オーストリアにより下バイエルン公ハインリヒを味方に付けた。さらにハンガリーとも同盟を結ぶことに成功、オタカルも選帝侯もルドルフが

単独でここまで味方を増やすとは夢にも思っていなかった。

これによりオタカルは完全に包囲される形となり、ウィーンで籠城をすることとなる。(3)幅 健志によるとルドルフはウィーンの特産である広大なぶどう畑を焼き尽くすとウィーン市民を恫喝し、門を開けさせ無傷で入城した。オタカルはルドルフに屈し、膝を折った。そこですぐさま取り決めが行われた。その内容はオタカルの帝国追放令は取り消し、ボヘミアとメーレンに関しては改めて封土、オーストリア、ケルンテン、シュタイアーマルク、クラインは帝国が没収するといったものだった。封土授与式にオタカルは宝石をちりばめた金箔の衣服を纏い多くの従者を引き連れて現れた。それに対してルドルフは普段のみすぼらしい格好であった。オタカルはいかにきらびやかな衣装が汚れようとも封土を受けるためには跪くしかなく、みすぼらしい格好のルドルフがオタカルを見下した瞬間だった。

選帝侯たちは皆驚愕した、あわよくばルドルフとオタカルの相打ちを狙っていた諸侯たちであったがルドルフは鮮やかな手際でオタカルに轡を取らせたのだった。ルドルフ侮りがたし、とても傀儡で収まるような人物ではないという空気が広がった。すると、ルドルフが第二のオタカル以上になるのではないかと恐れた下バイエルン公ハインリヒがオタカル側に寝返った。

そしてそのままおとなしく黙っているはずのないオタカルが再び動き出した。一度ルドルフに屈したことにより帝国追放令を取り消されて動きやすくなったオタカルはルドルフの作った新しい体制に不満を持つウィーン市民、ポーランド、そして旧領地のオーストリア、シュタイアーマルクらの豪族などを次々と味方につけていく。オタカルとルドルフの戦力差は火を見るより明らかだった。

しかしここでもルドルフの才能が発揮される。ポーランドの有力貴族と結ぶことでオタカルとポーランドの同盟を破棄、ポーランド国内ではオタカルにつくのかルドルフにつくかで混乱することになる。そしてルドルフが皇帝となる前に敵対し争っていたバーゼル司教までもルドルフの下に駆け付けた。さらにはルドルフ陣営の切り札、ハンガリー王ラーズロー4世率いるハンガリー騎兵が到着する。

ラーズロー4世が味方に付いた背景としては当時のハンガリーの中で貴族の力が非常に強かったという点もある。ラーズロー4世の時代ヘンリクという貴族の影響が非常に強く、ラーズロー4世自身傀儡として扱われ、殺害されかけたこともあった。何故貴族がそのような強い権力を振るう事が出来たのかというのには庇護者としてのオタカル2世の力が大きかった。ヘンリク亡き後もオタカル2世が居続ける限りいつ第二のヘンリクが現れるかわからない、ハンガリーはルドルフにとって最適の同盟者であった。遊牧騎馬民族であるクマン族によって編成されたハンガリー騎兵は重装備のボヘミア兵に

対し身軽さで対抗したがその機動力は凄まじいものであったという。

だがそれでもオタカルとルドルフの兵力差は埋まらなかった。味方であるチロル伯マインハルト 2 世とゲルツ伯アルブレヒトが兵を連れてこようと国に帰ると内乱が起きており戦いまで間に合わなかったのである。しかしオタカルに頼んで戦いを待ってもらうわけにもいかず、ルドルフは戦力的に不利なままマルヒフェルトでオタカルを迎え撃つこととなる。



図3 ルドルフ1世とラースロー4世の会見(タン・モル画/1872年)

中央左ルドルフ1世、右ラースロー4世

(Mikó Árpád - Sinkó Katalin (szerk): Történelem-Kép, Szemelvények múlt és művészet kapcsolatáról Magyarországon, A Magyar Nemzeti Galéria kiadványai 2000/3, cat. no.: XIII-5. より)



図4 ラースロー4世(1262~1290)(IV. László kun viseletben. Inicialé a Képes Krónikában (1358) - photo taken by uploader User:CsanádyLadislaus IV, half-Cumanian king of Hungary in Cumanian clothes. より)

5. マルヒフェルトの戦い



図5 ルドルフ1世とオタカル2世の戦い

(ユリウス・シュノル・フォン・カROLSフェルト画/1835年)

(Julius Schnorr von Carolsfeld - Zeichnungenより)

1278年8月26日、ウィーン北東40キロのマルヒフェルト。オタカルとルドルフの因縁の対決の火蓋が切られた。

オタカルの圧倒的有利な状況から始まったこの戦い、戦いの士気は当然両王が行うわけだが戦いの途中でルドルフは落馬してしまう。すぐさま近くの騎士に救われ事なきを得たものの何しろ当時のルドルフは齢60に近い、しかしそこを計略で補うのがルドルフであった。

両軍の膠着状態を破ったのはルドルフがあらかじめ用意していた伏兵だった。夏の暑さに弱い重装備で疲弊していたオタカルの軍に伏兵5、60騎が側面から攻撃を仕掛ける。これが決定打となりオタカル軍は総崩れになり敗北、またオタカル自身もその混乱の最中命を落とすこととなる。

ではこの戦いで何故オタカルがルドルフに敗北することとなったのか、もちろん戦略面でもルドルフは動いていた。ドミニコ派の托鉢修道士を庇護し、大規模な情報戦を繰り広げ決戦前に「黒鷲が獅子を倒す夢を見た」などといった噂を流したりした。予知夢や占いなどの影響力が強かった当時の時代では有効な作戦だった。

他にもさまざまな戦略を仕掛けオタカルを翻弄したルドルフではあるが、本文ではルドルフの戦術面に着目して取り上げていきたいと思う。

6. マルヒフェルトの戦いにおけるルドルフの戦術

圧倒的に兵力で劣るルドルフがマルヒフェルトにおいてオタカルに勝利した直接的な要因としては伏兵 5、60 騎による奇襲が大きい。もちろんこれはマルヒフェルトの地形を考えた上の作戦ではあるが、その点を除いても何故奇襲がそれほどまでに圧倒的な効果をもたらしたのか、当時の時代背景について考えていきたい。

騎士の時代、戦術と言うものが存在したというのかについてである。

(4)堀内一徳によると 982 年にオットー 2 世がカラブリアのコトローネで破れた戦いなどでもアブル・カシムによる隠されていた騎士による側面攻撃、つまり奇襲でオットー 2 世の騎士を破っている。また、933 年のリアデの戦いにおいてドイツ王ハインリヒ 1 世も前衛の騎士の偽装退却の後、ひそかに待機していた騎士による敵の騎士部隊の側面を攻撃する奇襲戦法をとっている。

つまりマルヒフェルトの戦いが行われる時代の前に既に奇襲戦法というものは確立されていたのである。では何故ここまでマルヒフェルトの戦いでは奇襲戦法の効果が高かったのか。時代の変遷の中での戦術の変革について述べていきたいと思う。

7. 時代の変遷に伴った戦術の変革

戦術はヨーロッパではかの有名なカルタゴの名将ハンニバルの時に生まれたと言われている。しかし西欧では時代が進むにつれ武装が高価になっていったことで騎士は富裕な人々のみになっていった。(4)堀内一徳によると 12 世紀ごろには騎士階級は伝統を持たない家門の子弟を次第に排除し、以降社会の下層の人々に対しては門戸を閉ざし、13 世紀中頃から貴族身分を形成していった。騎士の身分が形成されていくにつれ、「騎士とはこうあるべき」といった概念が生まれ、その中の一つが「騎士とは正々堂々戦うべき」というものであったため戦術というものは一度廃れてしまった。

もちろん全ての戦術が廃れてしまったというわけではない。中世のこの時期の攻撃の重要点としては敵兵と直接対決するわけではなくむしろ相手を戦場から敗走させることであった。そのため装備も戦いにおける重要な要素の一つではあった。(2)マシュー・

ベネット他によると、装備の劣る歩兵を高価な甲冑に身を包んだ騎兵が威嚇することで相手を敗走させようとさせるのも一つの戦略だったというのである。敵兵の一部でも騎兵との戦闘を嫌がり敗走すれば陣形の崩れを突いて攻撃することが可能となる。そうして敵の軍隊自体が一部敗走による陣形の崩れで脆弱になれば敵全体を敗走させ勝利を得ることもできるのである。

その為マルヒフェルトの戦いでオタカル率いるボヘミア兵は重装騎兵を使用していたわけだが、勇敢で機動力の高い遊牧騎馬民族によって構成されたハンガリー軍であったこと、奇襲と言う切り札を隠し持っていたという点からこの戦いにおいては効果があったかと言うと、むしろ暑さによる疲弊が早まるという点ではマイナスだったと言える。

しかしこのような装備による戦術もカルタゴの将軍ハンニバルから築かれていった数々の戦術と比べて見ると廃れていってしまったことがよくわかる。

戦う為に生まれた騎士であったが騎士階級の形成と騎士道と言う概念の登場により、いつの間にか今まで築き上げた戦術を置き去りにしたと言えるのではないだろうか。

8. 当時の奇襲に対する評価

先述した通り当時一般的とされた戦術は一騎打ちや騎兵による突撃であった。騎士道に重きを置かれていた当時では弓さえも卑怯なものとされたのである。その時代に置いてルドルフのとった奇襲という戦術は卑怯中の卑怯であったと言える。逆に言ってしまうえば卑怯であるが故に誰も予測をしていない戦術だったとも言えるであろう。

9. 考察

オタカル2世がマルヒフェルトの戦いにおいてルドルフ1世に敗北した理由の一つである奇襲という戦術。

ルドルフの奇襲という戦術は当時の時代では卑怯とされ誰も使うことを予測していなかった。誰も予測できないという点を逆手に取り、奇襲という選択肢を取ったルドルフ。確かにその手段は有効ではあったが、皇帝と言う立場を考えれば当時卑怯と言われた戦術で汚名を被りつつも勝利を手にした点から彼の覚悟の強さを伺うことができるのではないだろうか。選帝侯に所領を取られ、マルヒフェルトの戦いで負けてしまえば後のないルドルフとやり直すことのできる王族出身のオタカルにはそういう精神的な面においても差があったのではないかと私は考える。

また後年卑怯とされていた弓による戦術が開発されたことにより、イングランドとフランスによる百年戦争から新たな戦闘体系へと変化していくこととなる。ルドルフとオタカル、彼らの戦いはこの先走りだったのかもしれない。

10. 引用・参考文献

(1) 菊池良生 ハプスブルク家の人々 新人文庫

(2) マシュー・ベネット ジム・ブラッドベリー ケリー・デヴリース
イアン・ディッキ フィリス・G・ジェスティス
戦闘技術の歴史2 中世編 創元社

(3) 幅 健志 ハプスブルク家異聞 (その 3) 青竜の一門：王家創立の頃

(4) 堀内一徳 中世前期における騎士の戦術と武装